

# □ 各地の音楽活動 ● 北海道

八木幸三

札幌交響楽団にとって2015年は大きな節目となった。10年間にわたり音楽監督を務めた尾高忠明が3月に退任し、新たにドイツの名匠マックス・ボンマーが首席指揮者に就任。首席客演指揮者だったラドミル・エリシュカは名誉指揮者となった。また昨年の事務局長交代に続き、今年は専務理事も代わり運営面でも新体制となった。ボンマーが首席指揮者として初の采配をふるった7月定期では、祝祭的なメンデルスゾーン／交響曲第2番が札幌合唱団を伴って壮麗に演奏され、12月定期では、ドイツ・ピアノ界の重鎮ゲルハルト・オピッツと組んでのベートーヴェン／ピアノ協奏曲第4番とブルックナー／交響曲第4番でドイツ正統派音楽をじっくりと聴かせた。エリシュカも6月定期で、ベートーヴェン、ブラムスの交響曲でドイツ音楽の内面性をじわりと聴かせた。尾高忠明は、2年がかりのシベリウス・チクルスの最終回で交響曲第5番～7番を演奏。彼がこのチクルスにかけた熱い思いが伝わる自信に満ちた演奏が聴けた。尾高は3月に札幌出身の若きヴァイオリニスト成田達輝を帯同し4都市5公演におよぶ台湾公演を行い、延べ1万人の聴衆の歓迎を受けた。なお、成田は2015年度道銀芸術文化奨励賞を受賞している。この公演でコンサートマスターを務めた伊藤亮太郎は、その後N響のコンサートマスターに就任した。今年の定期では、かつて札幌と競演した二人の大物独奏者が指揮者として登場。9月定期のハイツ・ホリガーは、吹き振りでセピア色とも言える懐かしさのあるオーボエの音色とバルトークの「管弦楽のための協奏曲」では緊張感のある厳格な指揮で名演を聴かせた。アシケナージは11月定期でショスタコーヴィチ／交響曲第10番を熱演した。外国の客演指揮者、独奏者が多かった中、広上淳一の指揮で小山実稚恵を迎えてのラフマニノフ／ピアノ協奏曲第3番では、小山のダイナミックなピアノイズムが印象に残った。

今年のパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）は、フェビオ・ルイジ以来2年間不在だった芸術監督に9年前に首席指揮者を務めたワレリー・ゲルギエフが3年間の任期で就任。PMFオーケストラ（PMFO）で、ショスタコーヴィチ／交響曲第10番と彼が共同委員長を務める今年のチャイコフスキー国際コンクールの覇者、D.マスレフを独奏に迎えたラフマニノフ／ピアノ協奏曲第2番を指揮し、ゲルギエフならではの画期的な企画となった。ただ、超多忙のゲルギエフがPMFに帯同した期間がわずか5日間で、PMFアカデミー生に彼のカリスマの音楽性が十分に伝わっていたかは疑問との声も聞かれた。当初、首席指揮者に予定されていたディヴィット・ジンマンが健康上の理由で降板し、以前からPMFとの関わりが深い準・メルクルが急きょ代役を務めPMFOのAプロを曲目変更せずに指揮した。メルクルの勢いのある音楽づくりをアカデミー生は体験できたものの彼の滞在期間も短かったことが惜しまれた。しかし、有名指揮者に代わって、アカデミー生を牽引したのが欧米オケの首席級教授陣たち。中でもウィーン・フィル首席のR.キューヒルの存在は特筆に値する。例年期間前半が欧州オケ、後半を米国オケが担当するが、キューヒルは全期間を通して関わりコンサートマスターとしてもPMFOを強力に牽引した。今年は、これまでの協賛企業が撤退し、圧縮された総予算の中で経費削減の工夫がはかられた。コンサート数は減ったものの指揮コース、声楽コースが復活され観客動員数はこれまでの実績を維持するなど組織委員会の努力が成果となって現れた。

今年で創立50周年を迎えた北海道二期会が、その記念公演として「アイダ」を全幕原語で本道初演した。オケを含め全て地元出演者で、完成度の高いオペラが観られ、同会の半世紀の重みを感じさせた。同会は、「さっぽろオペラ祭」で松井和彦台本・作曲による「目黒のさんま」などの短編オペラ2本を作曲者自身の指揮・演出で公演。子どもも楽しめる、わかりやすい内容で聴衆を沸かせた。十周年を迎えた同オペラ祭では、他に北海道教育大学・実験劇場、札幌オペラシンガーズなどが参加。さらに札幌室内歌劇場は、モーツァルト最初期のオペラ、「バステイアンとバステイエンヌ」を日本語上演した。たった3人の登場人物と簡素な筋立てながら、作曲者の本格的オペラへの片鱗が散見され、レチタティーヴォは岩河智子が新たに作曲し、物語にふくらみをつけた。LCアルモーニカは、岩見沢市で「夕鶴」と「カルメン」を公演。地方都市公演ながら完成度の高いステージで多くの観衆を集めた。さらに帯広市民オペラは、指揮に杉原直基、演出に久恒秀典を迎え、独唱、合唱、バレエ、管弦楽など市民が中心となり「こうもり」を上演した。

シベリウス生誕150年の今年は、道内でもシベリウス作品が多く演奏されたが、前述した札幌シベリウス・チクルスをはじめ、11月にはオッコ・カム指揮、ラハティ交響楽団の来道や新田ヨリ指揮による「シベリウス・フェスティバル」が、ソプラノの駒ヶ嶺ゆかりなど地元演奏家も加わり相前後して開催された。

札幌に、もう一つ高質な響きを持ったホールが7月に誕生した。「ふきのとうホール」はゆったりとした二百席ほどの客席を有し独奏や室内楽などには打ってつけ。「モザイク・カルテット」による弦楽四重奏をはじめ、1ヶ月にわたり25回におよぶ開館記念コンサートがおこなわれた。

元札幌チェリスト文屋治実は、今年も精力的な活動を展開。3月に岡部亜希子（Vn）新堀聡子（P）と共にピアノ三重奏団をつくりアレンスキー作品などを演奏、5月には「現代のチェロ音楽コンサート」シリーズの24回目として黛敏郎／無伴奏チェロのための「BUNRAKU」を左指で弦をはじく三味線特有の奏法やグリッサンドを駆使して、太棹三味線のような力強さをチェロで見事に表現していた。一方現役札幌団員による室内楽も盛んにおこなわれた。弦楽器奏者でつくる弦楽三重奏団「TRIO ANIMUS」はバッハ作品を編曲した「シャコンヌ」や「ゴールドベルク変奏曲」などを原曲の持ち味を生かしながらメリハリのある音楽で聴かせた。札幌首席ヴァイオリニスト大森潤子は札幌で3回目のリサイタルを開き、壮麗なフランクや激情的なラヴェル作品で存在感のある熱演を繰り広げた。

ピアノのアンサンブルが楽しめたコンサートでは、ウズベキスタン出身で世界的に活躍するファズ・フサノフと札幌を中心に活動する大高紫乃が、「2台のピアノによる交響」と題し、息のあった演奏を聴かせ、北海道桐朋会は、創立30周年を記念し仲道郁代など桐朋学園大出身のゲストを迎え、4人の地元ピアニストによる2台のピアノ連弾曲や、シャブリエ、ラフマニノフの2台のピアノのための作品などダイナミックな演奏で、聴衆を魅了させた。札幌出身のピアニスト遠藤郁子が2月にポーランド共和国功労勲章を受章した。

北海道作曲家協会は、「モーツァルトの協奏曲の旋律が、それぞれの楽器に用いられていること」を条件に木管五重奏団「ウインドアンサンブル・ボロゴ」との協力で曲制作と演奏を行うユニークなコンサートを3月に開催。また、7月には中国の学生20名ほどを招き会員作品の課題曲と中国作品を含めた多彩な曲目で「第2回ヤングチャイナコンサート」と、8月には会員8名と一般公募した2名の個性溢れる作品による「第3回北海道の作曲家展」を開催した。

新進演奏家育成プロジェクト・リサイタル・シリーズSAPPROは4公演がおこなわれ、オーボエ岡本千里、ソプラノ谷地聡子、ピアノ小雪山絵、ヴァイオリン川村拓也が、それぞれ個性ある演奏を披露した。